

|         |                        |         |       |
|---------|------------------------|---------|-------|
| 氏名(本籍)  | たんのひろあき<br>丹野宏昭(北海道)   |         |       |
| 学位の種類   | 博士(心理学)                |         |       |
| 学位記番号   | 博甲第5052号               |         |       |
| 学位授与年月日 | 平成21年3月25日             |         |       |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当           |         |       |
| 審査研究科   | 人間総合科学研究科              |         |       |
| 学位論文題目  | 青年期と老年期における友人関係と適応との関連 |         |       |
| 主査      | 筑波大学教授                 | 文学博士    | 松井豊   |
| 副査      | 筑波大学教授                 | 博士(心理学) | 吉田富二雄 |
| 副査      | 筑波大学准教授                | 博士(心理学) | 佐藤有耕  |
| 副査      | 筑波大学教授                 | 博士(心理学) | 大川一郎  |

## 論文の内容の要旨

### (目的)

青年期以降において、「ふだんからよく会う親密な友人(HI友人)」だけではなく、「現在はめったに会えないが親密な友人(LI友人)」もまた形成されていることが先行研究から指摘されている。本論文では、青年期と老年期におけるこの2種類の友人関係を弁別的に捉え、2種類の友人関係の関係形成の実態を把握し、各友人関係における関わり方を友人関係成分の枠組みから検討し、友人関係が生涯を通じて適応にどのような役割を果たしているか明らかにすることを目的とした。

### (対象と方法)

大学生と高齢者を対象に、11種の研究(質問紙調査および面接調査)を行った。

### (結果)

第4章では、第1の目的に沿って、青年期と老年期のHI友人関係とLI友人関係の存在と関係形成の実態を検討した。結果、青年期と老年期とで共通して、多くの人がHI友人関係とLI友人関係の両方を有していることが確認された。HI友人関係は、青年期と老年期とで共通して、主に日常生活での所属集団内で、日常生活を共有することで形成されていることが明らかになった。LI友人関係は、青年期と老年期とで共通して、それまでの発達段階において形成されたHI友人関係が、接触頻度の低下によって変化した関係であることが明らかになった。

第5章では、第2の目的に沿って、青年期と老年期における2種類の友人関係の友人関係成分を抽出して、2種類の友人関係の友人関係成分を比較し、各発達段階における2種類の友人関係の関わり方の特徴を検討した。その結果、青年期のHI友人関係はLI友人関係よりも「支援性」の関わり方がなされ、LI友人関係ではHI友人関係よりも「相互理解」「安心・気楽さ」の関わり方がなされ、「関係継続展望」「人生の重要な意味」の関係性評価が高かった。老年期のHI友人関係ではLI友人関係よりも、「娯楽性」「自己開示」の関わり方がなされており、高齢者のLI友人関係ではHI友人関係よりも、「肯定・受容」「安心・気楽さ」の関わり方がなされ、「人生の重要な意味」の関係性評価が高かった。

第6章では、第3の目的に沿って、青年期と老年期における2種類の友人関係と適応との関連を検討した。

結果、青年期のHI友人関係においては「肯定・受容」が、日常生活の適応の促進と関連していると解釈された。青年期のLI友人関係においては「自己開示」が、心理的適応の促進と関連していると解釈された。老年期のHI友人関係においては、「娯楽性」「自己開示」が、日常生活の適応の促進と関連していると解釈された。老年期のLI友人関係においては、「自己開示」「肯定・受容」が、日常生活の適応の促進に加え、心理適応の促進にも関連していると解釈された。

(考察)

第7章ではまず、青年期と老年期における各友人関係の実態や友人関係成分や適応との関連について、それぞれ整理した(表参照)。青年期と老年期とで共通して、日常生活を積極的に楽しみ充実させる役割を果たし日常生活を共有するHI友人関係と、自分の人生を肯定的に受け入れて心理的な安定をもたらす役割を果たしているLI友人関係とがそれぞれ、異なる適応側面に対して相補的な役割を果たしていると結論された。そして、日常生活の適応を促進するHI友人関係の一部は、接触頻度の減少によって、その後の発達段階において心理的適応を促進するLI友人関係へと変化すると結論された。最後に、本論文の知見から友人関係の発達的变化の特徴を考察し、本論文の位置づけや、社会的意義、今後の課題について議論を行った。

表 本論文の知見のまとめ

|     | 形成の実態                     | 主要な友人関係成分                          | 適応との関連                                      |
|-----|---------------------------|------------------------------------|---|
| 青年期 | HI<br>大学からの所属<br>集団内の友人   | 支援性                                | 肯定・受容が日常生活の充実度と関連                           |
|     | LI<br>小学校～高校<br>までの友人     | 相互理解, 安心・気楽さ<br>関係継続展望<br>人生の重要な意味 | 自己開示が精神的健康と関連                               |
| 老年期 | HI<br>老年期の所属<br>集団内の友人    | 娯楽性, 自己開示                          | 娯楽性, 自己開示が<br>日常生活の充実度, 安心と関連               |
|     | LI<br>児童期, 青年期,<br>成人期の友人 | 肯定・受容<br>安心・気楽さ<br>人生の重要な意味        | 肯定・受容, 自己開示が<br>日常生活の充実度<br>精神的健康, 人生の受容と関連 |

## 審査の結果の要旨

青年期と老年期の2つの発達段階における友人関係を、HI友人関係とLI友人関係という2種類の友人関係に分類して検討を行った。これらの友人関係を、友人関係成分という共通の枠組みの視点を用いて検討した研究である。これまでの心理学領域では着目されてこなかった老年期の友人関係を捉えており、大学生と高齢者に対して面接調査と質問紙調査を丁寧に行うことで知見を積み重ねている。理論的展開や実証面に検討課題を残すが、異なる種類の友人関係を統合的に扱おうと試みた意欲的な研究として評価される。

よって、著者は博士(心理学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。